

世界の農林水産

Summer
2010

World's Agriculture, Forestry And Fisheries
FAO News No.819

特集

持続可能な畜産部門 の発展に向けて

FAO「世界食料農業白書 (SOFA) 2009 年報告」

Report

経済危機は開発途上国に どのように伝播したか

FAO「世界の食料不安の現状 (SOFI) 2009 年報告」



JAICAF ジェイカフ

世界の農林水産



World's Agriculture, Forestry And Fisheries
FAO News No.819

03 特集

持続可能な畜産部門の発展に向けて

FAO「世界食料農業白書(SOFA)2009年報告」

10 Report 1

経済危機は開発途上国にどのように伝播したか

FAO「世界の食料不安の現状(SOFI)2009年報告」

16 Report 2

FAO貧困削減・農業投資促進に関するシンポジウム

20 インターン報告記

国連機関で働く自信につながったインターンシップ

FASID/GRIPS 国際開発大学院共同プログラム

修士課程「国際開発プログラム」修了 サミュエル・フィリ

21 Crop Prospects and Food Situation 穀物見通しと食料事情 2010.2

世界の穀物需給概況／食料危機最新情報

26 FAO水産養殖局とは？ 第1回

FAO水産養殖局とその活動

FAO水産養殖局 漁業連絡調整官 渡辺 浩幹

30 Food for All FAOの活動にご協力いただいている団体

サヘル地域における住民の「生活」を重視した

環境保全活動をめざして

緑のサヘル 代表 岡本 敏樹

32 FAO寄託図書館のご案内

33 PHOTO JOURNAL

FAOのアフリカ農業開発への日本の貢献

—サハラ以南アフリカの稲作・水産養殖の生産性向上を目指して

FAO技術協力局 事業調整官 安原 学

36 FAOで活躍する日本人 No.20

技術は何のために？誰のために？

FAOミャンマー事務所長 今井 伸

38 FAO MAP

世界の栄養不足人口 —ハンガーマップ

世界の農林水産

FAO News Summer 2010

通巻819号

平成22年6月1日発行

(年4回発行)

発行

(社)国際農林業協働協会 (JAICAF)

〒107-0052

東京都港区赤坂8-10-39

赤坂KSAビル3F

Tel : 03-5772-7880

Fax : 03-5772-7680

E-mail : fao@jaicaf.or.jp

www.jaicaf.or.jp

共同編集

国際連合食糧農業機関 (FAO)

日本事務所

www.fao.or.jp

編集：宮道 里か、リンダ・ヤオ

(社)国際農林業協働協会

編集：森 麻衣子、廣瀬 ちづる

デザイン：岩本 美奈子

本誌と月刊ニュースレター

「FAO Newsletter」は、

JAICAFの会員にお届けしています。

詳しくはJAICAFウェブサイトを

ご覧ください。

 100

古紙パルプ配合率100%

再生紙を使用

国連で働くことは?
日本人で活躍する FAO

No.20

FAOミャンマー事務所長
今井伸

1977年に国際技術協力の世界に足を踏み入れて以来、33年の歳月を重ねてきました。今でも最初の技術協力の地、ブラジルでのことを思い出します。日系人が多く移住していたブラジル南部のレジストロという街で、輪中方式の圃場整備について調査・測量・設計・積算を担当し、専門家として昼夜の隔てなく成果を求めてきました。ここで気になることは、

「自分は一体誰のために仕事をしてきたんだろう?」ということです。現地の事情に即した最適な設計をしたという気持ちはあるのですが、そこには技術面ばかりを追及し、はたしてそれを活用する人たちのプロジェクトに対する「満足感」を考えてきたのだろうかという疑問が残りました。

私は、その後日本の国内でプロジェクトへ



ミャンマー政府の畜産・水産大臣との現地視察（中央が筆者）。

の計画そして建設という現場の仕事に携わりました。そこでは受益者である農家の皆さんのが喜ぶ顔を見ると本当にうれしくなりましたし、その逆に負担金ばかりが高くなるというような苦情もありました。このようにプロジェクトの実施に際しては、いろいろな反応があるわけで、農業プロジェクトの正確な評価手法について大きな疑問を持ちました。それは、プロジェクトの

結果として現れる定量的および定性的な評価をどのようにすれば「総合的に測定できる」のだろうかということでした。

それから時が経ち、2001年からFAOの旗艦プロジェクトである「食料安全保障特別事業（SPFS）」に参画することになり、開発途上国の人たちが本当に喜んでくれる技術協力とは何か、そしてそれをどのよ

うに評価していくのかについて直接携わる機会を与えられました。当時も、そして今でも援助対象国となっているバングラデシュのことですが、彼等は「もらうこと」が当たり前になっていましたし、また、ドナー側についても「あげること」が当たり前になっていたのではないかと思っています。受益者である農家側から見て「嬉しい」、つまり「満足しない」プロジェクトは相手にされないということに関連しています。しかし、だからといって「ただ」あげることでプロジェクトの目的を達成するものではありませんから「何のために? 誰のために?」ということを追及する必要があるわけです。

私は、ここで新たな、しかも思いきった方針を受益者に示しました。それは「プロジェクトはただではないから、全額返してください」というものでした。これには、さすがの援助慣れしている農家の皆さんも驚いたようですが、具体的なプロジェクトの計画と、運営方法を技術指導することにより、具体的に費用対効果が計測されることと、プロジェクトの成功につれて、受益者の皆さんとのプロジェクトに対する「満足感」が実感として滲み出てくることを体験しました。この仕組みを具体的な評価方法で計測したものがVPA (Vectorial Project Analysis) ですが、これはプロジェクトの発展の度合いをTangible (具体的な形のある) およびIntangible (形のない) なデータを使って評価したもので、具体的にプロジェクトの発展度合いを「大きさ」で表現できるため誰にでも分かりやすい評価方法といえます。

私は、現在FAOミャンマー事務所長を勤めておりますが、2008年5月のサイク

ロン被害、ミャンマー各地での食料安全保障問題は早急に解決すべき大きな課題となっています。その一方で、ミャンマー国が保有する膨大な利用可能な水資源、土地資源そして人的資源の活用を図ることにより、ミャンマー国のみならず、アジア地域全般に及ぼす食料安全保障そして最終的には世界の食料安全保障に貢献する可能性を有しています。国際連合が合意し努力しているミレニアム開発目標 (MDGs) では、貧困解消などを含めた8つの目標が定められていますが、私たちは「何のために? 誰のために?」ということを念頭に入れ、現場に適応可能な最適な技術を駆使して、受益者が「満足してくれる」仕事を達成しなければなりません。

FAOでは「世界のすべての人が現在、将来にわたって持続的な食料を得られる」ようにとの思いから、FAOで働くことの誇りと、食料安全保障の達成に力を注いでいます。人間による自然破壊が地球を苦しめている、そして想像以上に急激に変化している気候変動による自然災害、食料生産能力に直接影響を及ぼす土壤劣化など、人間の尊厳を守るべき食料安全保障を取り巻く今日の環境はとても厳しいものがあり、これからも続く長い戦いになるでしょう。

技術は何のために?
誰のために?



ミャンマー北部のラカイン州マングドゥにて、農村の女性たち。ニワトリの配布を行っている。

サイクロン被害者の経営する小さな店。ミャンマー・イラワディ管区のラブタ地区にて。

